第二講　「論証」を読む

Ⅰ　「A→x」の発見

論証が必要な命題（文）には「A→x」という飛躍した部分があります。まずは、どこに飛躍があるかを見つけましょう。

> **①　主語（主部）→述語（述部）に飛躍がある場合。**
> **②　修飾部（接続部）→被修飾部（文）に飛躍がある場合。**

※文構造（係り受け）を分析する中で、構造的につながっているが、意味的につながっていない部分を探します。
※「x」は、「なぜ『〜』か」というように設問が指定している場合もあります。

Ⅱ　論証部の発見

飛躍を埋める部分が論証部となります。「A→x」のAの説明を求めましょう。

Ⅲ「論証」のフレームワーク

①「単純な論証」Ａ→Ｂ

根拠Ａから主張Ｂが導かれている。

例文　Ａ子ちゃんは美人だ。　　**根拠　Ａ**

したがって、　**導出**　↓

私はＡ子ちゃんが好きである。　　**主張　Ｂ**

※実はこの導出に必要な前提として、「私は美人が好きだ。」というものがあります。
これは「隠れた前提」として筆者の論証が成り立つように補ってやる必要があります。
筆者の論証が成り立つように隠れた前提を補うというルールを「**寛大の原則**」といいます。

②「論証の連鎖」　A ↓ B ↓ C

主張Aが根拠Aとなって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠Bとなって主張Cが導かれる。

例文　A子ちゃんは目鼻立ちがはっきりしている。　**主張A ＝ 根拠A**

したがって、　**導出** ←

A子ちゃんは美人だ。　**主張B ＝ 根拠B**

したがって、　**導出** ←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※この形が「論証」の中では一番多いです。「論証」の最後に来る文が「主張提示文」になります。
その前の文は「根拠」となります。

③「結合論証」

B ＋ A
↓
C

主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。

例文

A子ちゃんは美人だ。　**主張A**

＋　結合　＝　**根拠**

私は美人が好きだ。　**主張B**

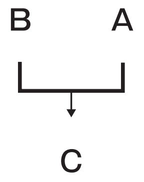
したがって、　**導出**　←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※25ページに説明した「隠れた前提」がある場合、この「結合論証」となります。
この形も「理由説明問題」ではよく出題されます。

※「Aのみ」「Bのみ」の解答は減点されます。

④「合流論証」



根拠Aだけでなく根拠Bもあり、主張Cが導かれる。

例文　A子ちゃんは美人だ。　**根拠　A**

また、

A子ちゃんは性格もよい。　**根拠　B**

したがって、　**導出** ←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張　C**

※この場合はどちらか片方だけでも「根拠」になります。
設問の場合には「理由を二つ説明せよ」となることが多いです。

傍線部理由説明問題

傍線部の問題の2大パターンが前回の「傍線部説明問題」と今回の「傍線部理由説明問題」です。ではまずその形式から確認しましょう。その設問形式は次の通り、

傍線部～とあるが、なぜか　説明せよ。
or
その理由を

というものです。この問題に対してもやはり一定のアプローチの仕方があるので、今回はその設問解法を学びましょう。

傍線部理由説明問題解法

―「なぜか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・A → ×
（飛躍している部分）

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。
・Aの説明
・「論証」のフレームワーク

（次ページより問題演習）

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

失われた十年からまだ完全には抜け出せない二十一世紀初頭の日本。今、豊かさを謳歌(おうか)する気分にはなれないでしょうが、百年という長い時間の尺度で見れば、日本は疑いようもなく豊かになりました。しかも、日本は豊かになっただけではありません。A百年前に比べて、おカネそのものが安くなったのです。

このようなことを言うのは、最近夏目漱石の『野分(のわき)』を読み直したからです。一九〇七年、ほぼ百年前の作品です。

『野分』の主人公は二人の男です。一人は大学を出たばかりの無職で肺病病みの「高柳君」。もう一人は孤高の文学者「白井道也」。道也はもと地方の中学校教師でしたが、その町を潤す石油会社の金権主義を批判してクビになった過去があります。

二人は同じ問題を抱えています。それは大志はあるのにおカネがないという問題です。二人がもっとも目の敵にするのは三菱(みつびし)財閥の創立者「岩崎」。二人が出会う道にも「岩崎の塀が冷酷に聳(そび)えて」います。

「岩崎の塀を三度周(まわ)るといい散歩になる」。そう言うのは、道也です。高柳君は若いから過激です。「岩崎の塀などを見ると頭をぶつけて壊してや

りたくなります」

　道也は応えます。「そんな愚な事を云わずに、正々堂々と創作なら、創作をなされば、それで君の寿命は岩崎などよりも長く伝わるのです……岩崎の塀なんか何でもない。ハハハハ」

「岩崎の塀なんか何でもない」というのは、まさに、「岩崎」がふつうのヒトには乗り越えることができないおカネの力を象徴するがゆえのせりふです。しかも、大著述のみに可能な永遠の寿命をもってしか、「岩崎」の寿命を越えることはできない。「岩崎」は未来永劫不動のもののように思われているのです。

　なぜこの時代「岩崎」という固有名詞が過剰な意味をもっていたのか。それは「岩崎」＝三菱が産業資本主義時代のおカネのありかたを象徴するものだったからです。

　十八世紀後半の英国から始まった産業資本主義の時代とは、機械制工場による大量生産の時代でした。そしてその時代はおカネがヒトを支配した時代でした。

　おカネがなければ「岩崎」を呪っているしかない。しかし、「岩崎」のようにBおカネさえあれば、必ず利潤を上げることができた。おカネはふつうのヒトの手には届かないが、万能であったのです。

資本主義においておカネで買えないモノはありません。おカネさえあれば、誰でも機械制工場を持つことができます。そして、産業資本主義の特徴は、機械制工場さえ持てば必ず利潤が上がったということにあります。

利潤とは何か。それは製品からの収入と、製品を作る費用との差です。

会社が機械制工場による大量生産で大きな収入を得ても、同時に費用が上がってしまえば、元も子もありません。ところが、産業資本主義時代においては、機械制工場さえ持てば必ず利潤が得られる仕組みが隠されていたのです。農村における過剰な人口の存在です。会社は都会に大量に流出してくる人々をいくらでも安い賃金で雇えますから、費用を低く抑え続けることができたのです。

二十世紀の後半、先進資本主義国に異変が起こります。農村からの人口流出が止まり、都会で働く労働者の賃金があれよあれよと上がり始めたのです。その結果、収入と費用の差が縮まり、縮まるにつれ、会社は機械制工場を持っただけでは利潤を確保できなくなったのです。産業資本主義――おカネの絶対的な力の終焉です。

繰り返しますが、利潤とは収入と費用の違いです。他社と同じ製品しか作れないならば、異なった技術を導入して費用を下げなければならない。他社と同じ技術しか使えないならば、異なった製品を作って収入を高めな

ければならない。会社はこの時から横並びの大量生産を止(や)め、違いを意識的に創(つく)っていかなければ利潤を生むことができなくなりました。

しかも違いは簡単にまねられる。一つの会社が新しい技術や製品を開発しても、すぐに追随されてしまいます。違いとは、一度創り出してもおしまいにはならない。まねされるたびに、いや、まねされる前に、新たに創り出し続けなければならないのです。その結果どの会社も、新しい製品や新しい技術をつねに開発し続けていかなければ、市場のなかで生き抜いていけない。

これが、現在進行中のポスト産業資本主義にほかなりません。

いうまでもなく、このような違いを意識的に創り出すことができる唯一の存在は、ヒトです。他と違った技術や製品を開発できる能力や知識をもった従業員や技術者や経営者こそ、ポスト産業資本主義における利潤の源泉になったのです。

そのときヒトは、モノとしてのヒトから、本来の意味でのヒトとなったのです。

農村から都会へ人口の流出がなくなった事実は労働者の賃金を高くしました。だが、賃金とは、一人のヒトを別のヒトと代替可能なモノであるかのように買うための費用でしかありません。ところが、その賃金というモ

ノの値段が上がることによって、産業資本主義はその存在基盤を失い、ポスト産業資本主義へと移行せざるをえなくなった。それは、モノとしてのヒトではなく、モノに還元できないヒトとしての能力や知識を利潤の源泉とせざるをえなくなったということです。

おカネで買えないモノはありません。だが、幸か不幸かヒトはモノではありません。ヒトに自由意思がある限り、その頭脳の中の能力や知識をおカネで買うことはできないのです。

おカネが安くなったということの意味がここにあります。

ポスト産業資本主義の時代とは、世間常識とは逆に、まさにおカネの力が大きく低下した時代なのです。だからこそ、おカネはわずかでも利ざやを稼ぐために、様々な金融商品に変身し、世界中の市場を飛び回らざるをえなくなったのです。それが金融革命であり、グローバル化なのです。資本主義の歴史の中で今ほどおカネが安くなった時代はありません。

『野分』に出てくるC「岩崎の塀」が、ふと気がつけば崩れ始めていたのです。

ポスト産業資本主義における最大のおカネ持ちは、マイクロソフトのビル・ゲイツ氏です。だが、D「ゲイツの塀」は、憧(あこが)れやからかいの対象にはなっても、呪いの対象になることはまれです。

産業資本主義の時代にはカネ持ちであることがカネ持ちになることの条件でしたが、ポスト産業資本主義になると、カネ持ちであることは、違いを他よりも早く生み出すことに成功したことの結果でしかないからです。しかも[E]今はマイクロソフトですら未来永劫不動な会社だと、だれも思っていない。ヒトの頭にある能力や知識をうまく利用できなくなれば、昨日は何百億ドルの利潤を上げている会社でも、明日はたちまち消えてしまっても不思議ではありません。

誰もがゲイツ氏になれるわけではありません。だが、おカネがないからといってマイクロソフトを興せないわけではない。ポスト産業資本主義時代とは、おカネはないが大志だけはある高柳君や白井道也のようなヒトが、そのまま朽ち果てていかなくても良くなった時代なのです。いや、「人類のため」を志している白井道也が高柳君とチームを組んで非営利会社を興し、[注]リナックスのようにマイクロソフトに挑戦することすらできる。

実は『野分』は、百円というおカネをめぐって将来あるヒトが自分の命を縮めざるを得ないという物語です。残念ながら、当時としても傑作とは言われませんでした。

（岩井克人「すべてはヒトに始まる」〈『日本経済新聞』二〇〇五年八月二九日朝刊掲載〉による）

（注）リナックス――無料で公開されているコンピュータの基本ソフト。

問一　傍線部Ａ「百年前に比べて、おカネそのものが安くなったのです」とあるが、どのような意味か。筆者の考えに即して、百三十字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

問二　傍線部Ｂ「おカネさえあれば、必ず利潤を上げることができた」とあるが、なぜ「利潤を上げることができた」のか。筆者の考えに即して、四十五字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

問三　傍線部Ｃ「『岩崎の塀』が、ふと気がつけば崩れ始めていた」とあるが、これと同じ意味を端的に表す語句を本文中から十二字（句読点を含む）で抜き出して示せ。

問四　傍線部Ｄ「『ゲイツの塀』は、憧れやからかいの対象にはなっても、呪いの対象になることはまれです」とあるが、なぜ「呪いの対象なることはまれ」なのか。その理由を三十五字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

問五　傍線部Ｅ「今はマイクロソフトですら未来永劫不動な会社だと、だれも思っていない」とあるが、なぜ「マイクロソフトですら未来永劫不動な会社だと」思われないのか。その理由を五十字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

問四

問五

第二講 「論証」を読む 解答

問一

百年前はお金があれば、農村の過剰人口を低賃金で雇って費用を抑え、機械制工場での大量生産で高収入を得られたので、お金の力があったが、現代ではお金があっても、利潤をあげるための差異を創る能力や知識を持ったヒトを買うことが出来ず、お金の力が無くなったということ。

問二

農村の過剰人口を低賃金で雇って費用を抑え、機械制工場での大量生産で高収入を得られたから。

問三

おカネの絶対的な力の終焉

問四

現代はおカネがなくともヒトの能力や知識で利潤をあげることが出来るから。

問五

現代はおカネがあっても、利潤をあげるための差異を創る能力や知識を持ったヒトを買うことが出来ないから。